

怪異を語る

— 伝承と創作のあいだで —

日時 平成27年11月21日(土)

14時開演

会場 成城大学

パネリスト

京極 夏彦 (小説家・意匠家)

語り手の「視点」という問題 — 怪異と怪談の発生：能楽・民話・自然主義をめぐって

常光 徹 (国立歴史民俗博物館名誉教授・民俗学)

民俗学というメソッドからみた怪異の語られ方

東 雅夫 (アンソロジスト・文芸評論家)

百物語の歴史・形式・手法・可能性について

太田 晋 (成城大学法学部教授・英文学)

怪談／ミステリの語りについて — 京極作品を中心に

喜多崎 親 (成城大学文芸学部教授・美術史)

〈出る〉図像 — 絵画はいかに怪異を語るか

司会

佐藤 光重 (成城大学文芸学部准教授・米文学)



成城学園
百周年
since 1917

◆お申し込み方法 成城学園100周年記念サイト <http://www.seijo100th.info/> 成城学園100周年 検索
◆お問い合わせ先 成城大学文芸学部 TEL03-3482-9412 参加費無料 お申し込み多数の場合は、抽選となります。

怪異を語る

— 伝承と創作のあいだで —

シンポジウム開催の趣旨

近年、文芸における怪談ブーム、ポピュラー・カルチャーにおける妖怪ブームなどを背景に、「怪異」は特定のジャンルに留まらない注目を集め、さまざまな影響を及ぼすようになっています。たとえば、成城大学と深いつながりのある柳田國男も、民俗学という枠をこえて、怪談文化といった文脈でも語られるようになってきました。

学術研究においても、民俗学はもちろん、歴史学や宗教学でも「怪異」についての研究が蓄積されつつあります。しかし今回のシンポジウムでは、「怪異を語る」という点に着目しました。民間伝承からさまざまな創作までのあいだで、怪異とはいかに語られるのか。

京極夏彦氏、常光徹氏、東雅夫氏という、このテーマを語るうえで欠かせない方々をゲストにお迎えし、創作・批評・民俗学研究・文学研究・美術史研究など、異なる専門分野にたつ人たちが集い、それぞれの立場から問題を出し合うことで、「怪異」についての文芸学部的アプローチを試みたいと思います。

会場へのアクセス



小田急線「成城学園前」駅より、北口を出て徒歩3分
※小田急線「急行」は停車しますが「快速急行」は通過となりますので注意してご乗車ください。

◆シンポジウムの詳細・参加申し込み先

成城学園 100 周年記念サイト <http://www.seijo100th.info/>
または「成城学園 100 周年」で検索

※参加費無料 お申し込み多数の場合は、抽選となる場合があります。

◆お問合せ・参加申し込み先

成城大学文芸学部

TEL 03-3482-9412

登壇者の紹介

京極 夏彦 (小説家・意匠家)

全日本妖怪推進委員会肝煎。『水木しげるの漫画大全集』(講談社)監修。1994年『姑獲鳥の夏』でデビュー。1996年『魍魎の匣』で第49回日本推理作家協会賞長編部門受賞。1997年『喰う伊右衛門』で第25回泉鏡花賞受賞。2003年『規き小平次』で第16回山本周五郎賞を受賞。2004年『後巷説百物語』で第130回直木賞受賞。2011年『西巷説百物語』で第24回柴田錬三郎賞受賞。

常光 徹 (国立歴史民俗博物館名誉教授・民俗学)

國學院大学を卒業後、都内の中学校教員をへて国立歴史民俗博物館教授・総合研究大学院大学教授。現在は名誉教授。博士(民俗学)。著書に『学校の怪談—口承文芸の展開と諸相』(ミネルヴァ書房、1993年)、『しぐさの民俗学—呪術的世界と心性』(ミネルヴァ書房、2006年)、『妖怪の通り道—俗信の想像力』(吉川弘文館、2013年)ほか。児童書に『学校の怪談』シリーズ(講談社)、『怪談レストラン』シリーズ(共著・童心社)など。

東 雅夫 (アンソロジスト・文芸評論家)

早稲田大学日本文学科卒。『幻想文学』編集長を経て、現在は怪談専門誌『幽』編集顧問。ふるさと怪談トークライブ代表。著書『遠野物語と怪談の時代』(角川選書、2010年)で日本推理作家協会賞(評論その他部門)を受賞。著書に『文学の極意は怪談である』(筑摩書房、2012年)、編纂書に『たそがれの人間 佐藤春夫怪異小品集』(平凡社ライブラリー、2015年)、監修書に『怪談えほん』シリーズ(岩崎書店、2011年)ほか多数。

太田 晋 (成城大学法学部教授・英文学)

東京大学大学院人文科学研究科単位取得退学。現在成城大学法学部教授。専門はモダニズム以降の小説を中心とした英語文学。訳書にリチャード・クライン『煙草は崇高である』(共訳、太田出版、1997年)、ハイメ・マンリケ『優男たち アレナス、ロルカ、ブイグ、そして私』(青土社、2006年)、ロバート・イーグルストン『ホロコーストとポストモダン歴史・文学・哲学はどう応答したか』(共訳、みすず書房、2013年)など。

喜多崎 親 (成城大学文芸学部教授・美術史)

早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。国立西洋美術館主任研究官、一橋大学大学院言語社会研究科教授などを経て、現在成城大学文芸学部教授。博士(文学)。専門は19世紀フランス美術史。著書に『聖性の転位—一九世紀フランスに於ける宗教画の変貌』(三元社、2011年)、編纂書に『近代の都市と芸術2 パリ I—19世紀の首都』(竹林舎、2014年)、『岩波 西洋美術用語辞典』(益田朋幸と共編著、岩波書店、2005年)など。

佐藤 光重 (成城大学文芸学部准教授・米文学)

慶応義塾大学文学研究科単位取得退学、博士(文学)。専門はアメリカ植民地時代のピューリタン文学、ベンジャミン・フランクリン研究、ヘンリー・ソローを中心としたネイチャー・ライティング研究。